相対的剰余価値の生産

社会全体の生産力が引き上がると、生活手段（生活費）の価値は小さくなる。たとえば、同じ8時間労働でも生産力が2倍になると必要労働は、5時間から2.5時間に短くなる。そうなると剰余労働は、3時間から5.5時間に増えるので資本家の儲けが増える。

では、どのようにすれば、生活手段（生活費）の価値を小さくすることができるのか？
→生産力の上昇によって労働力の価値は小さくなる。

パンの製造で考えて見よう

＝100個

1時間200個×8時間＝1600個

5時間　　3時間

パン1個の価値
(19cz+1cf+20v+m)=40円

必要労働 V

労働力の価値＝20000円

剰余労働 m

剰余価値＝12000円

2.5時間　　5.5時間

1時間400個×8時間＝3200個

必要労働 V

労働力の価値＝10000円

パン1個の価値
(19cz+1cf+10v+m)=30円

剰余労働 m

剰余価値＝22000円

パンの価値
1600個×40円＝64000円
剰余価値
20円×200個×3時間＝12000円

パンの価値（個別的な価値）
3200個×30円＝96000円
剰余価値
10円×400×3時間＝22000円
ただしこのパンは
3200×40＝128000円の社会的な価値で販売できるので32000円の特別剰余価値を得ることができる。

新しい機械の導入によって生産力を2倍にした場合

19(cz)+1(cf)+20(v+m)=40円

＝200個／1時間

19(cz)+1(cf)+10(v+m)=30円

＝400個／1時間

相対的剰余価値の生産を理解するために

不変資本 c　生産手段＝労働対象（原料、加工された部品も含む）+労働手段（工場、土地、機械）

→ 原料は自分の価値を100%製造された商品に移転する。機械などは原価償却分だけ価値を商品に移転する

可変資本 v+m　労働力

→ 労働力商品だけが、使用価値を消費する過程で新たな価値を生み出す。

＝500個／1時間

新しい機械の導入によって生産力を2倍にした場合

＝1000個／1時間

1時間当たりで消費された労働力量は変わらないので生産量が2倍に増えるとパン1個あたりに注ぎ込まれた労働力量は2分の1になる。
つまり、1個あたりのパンの価値は下がる。

53万5000円　1964年

55年間

価格は704分の1

760円　2019年

資本家はどうして、技術革新によって生産力の向上を実現しようとするのか

技術革新によって生産力を引き上げると、商品1個当たりのコスト（労働力量）を下げることができる。しかし、販売する場合は、他の企業が生産力を引き上げない間は、社会的価値で商品を販売できる。資本家はこのことによって、特別剰余価値（特別利潤）を手に入れる。

相対的剰余価値の生産のメカニズム

個別的価値を社会的価値以下に切り下げ、特別剰余価値を得ようとする個別的諸資本の競争 ⇨ 生産様式の変革 ⇨ 労働生産力の発展 ⇨ 生活手段の価値の低下 ⇨ 労働力の価値の低下 ⇨ 必要労働時間の短縮 ⇨ 相対的剰余価値の生産

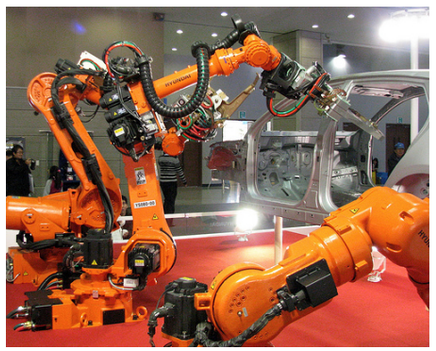
相対的剰余価値の4つの特殊な生産様式

1. 協業

共同作業のこと。資本家の指揮の下で同時に労働させ、生産規模を拡大すること。資本主義生産の歴史的出発点であり、資本主義生産の基本形態。協業によって相対的剰余価値の生産が行われた。労働者を一つの場所に集めることによって、建物、倉庫、容器、装置など生産手段の一部が共同利用されることによって、資本が節約されるようになった。集団による競争によって生産力が大きくなった。

2. 分業とマニュファクチュア

分業にもとづく協業。分割された労働は、協業を必要とする。分業によって生産様式が変革された。マニュファクチュアによる分業は、熟練と不熟練作業とに分離した。



1台1500万円のロボット＜1人年間785万円の人件費×2交替制＝1570万円

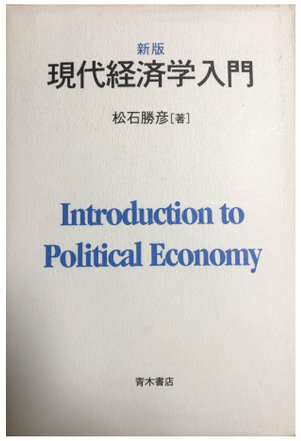
3. 機械と大工場

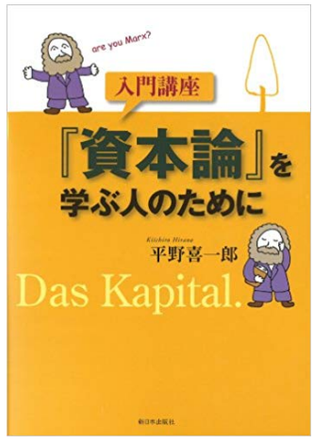
機械制大工場――産業革命（イギリス　1820年～30年代。機械は、原動機械、伝導機構、道具機械（作業機械）から成り立つ。一つの大きな自動装置を生み出した。機械は労働者を労働から解放するのではなく、労働の内容を破壊する。機械が労働者を使う。工場は軍隊的。労働災害が続発する。

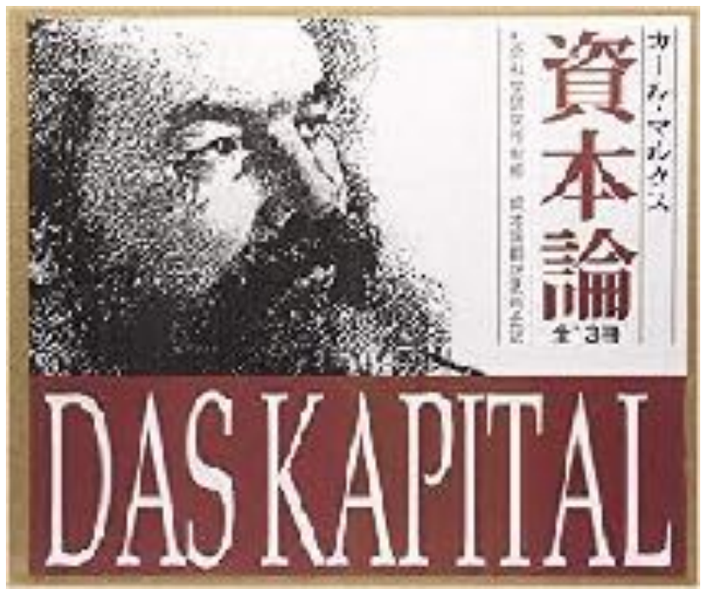
4. コンピュータ制御生産方式

コンピュータによる制御が導入され、機械制大工業は大変貌した。コンピュータによる新しい生産方式。コンピュータが人間に変わって制御する。コンピュータが最も重油な役割を果たす生産手段になっている。機械生産様式からコンピュータ生産様式への転換。生産様式の変革・革命、独自名資本主義的生産様式。

参考文献







以下は参考資料